

## 優しい未来へ

青森県五所川原市立金木中学校

一年 沢田 勇 渡

意地悪な三角形の目をしたトラ柄の子猫。「てご」という名前は、ぼくが付けました。「てご」は殺処分される予定だった保護猫でした。初めて会った日、「てご」はゲージの隅に小さく体を寄せて、必死に「フーッ！ フーッ！」

と、威嚇していました。小さくて、やせていて、長い毛はからまってボサボサしていました。

そんな「てご」と暮らして、もうすぐ一年。警戒心が強いところは変わらず、家族以外が家に訪ねてくると、風のように隠れてしまいます。小さかった体は年相応に成長し、獣医師にやせっぽちと言われながら、三キロも体重が増えました。何度か洗うと、とつてもキレイなフワフワの毛になりました。いつもぼくの後ろをニャアニャア鳴いてついてきます。意地悪な顔だけど、甘ったれでさみしがりやな可愛い家族です。

ペットショップには、可愛い子犬や子猫がたくさん売られています。ぼくが小さい頃から一緒に暮らしてきた犬も、ペットショップから買って来たそうです。だから今回もペットショップから買う予定で子猫をさがしていました。でも、保護猫をもらうことにしたのは、ネットニュースの犬や猫の殺処分分

の記事を読んだことが、きっかけでした。「引越すから。」「ペットが言うことをきかないから。」などの飼い主の身勝手な都合で捨てられ、保健所にもちこまれる犬や猫は、年間十三万匹にもほるそうです。そのうち、元の飼い主や新しい飼い主の手に渡るのは、三万匹にしか過ぎず、残りのほとんどが安楽死処分されてしまいます。炭酸ガスによる窒息死で、死ぬまでに十分以上もかかり、徐々に呼吸困難になっていきます。苦しみ、もがきながら死んでいき、その後、焼却処分されるそうです。決して安楽なんかじゃないのです。命ある犬や猫が、まるでゴミのように処分されていくのです。興味本位で安楽死処分について、検索しましたが、こんな現実が今日もどこかで行われているなんて……どんなに無念だろう、どんなに怖くて悲しいだろう、それを考えると涙が止まりませんでした。

家族に話して、さっそく動物愛護センターで、保護犬や保護猫を引き取るための研修に参加しました。動物の病気や予防接種の話、センターでの譲渡までの流れを学びました。

① 病気や望まない命を増やさないために、去勢、避妊手術や予防接種をし、室内で飼うこと。

② 家族の一員として大切にし、最後まで責任をもつこと。

この二つは、保護猫を引き取る時の獣医師との約束です。ぼくはこの小さな子猫を抱きながら、この約束をしっかり心に刻みました。

日本全国の動物愛護センターでは殺処分ゼロにするように取り組んでいます。殺処分には年間千六百万円もの予算が必要です。たくさん命を繋ぐというのは、きつとすぐく難しいことなんだろうなと思いつつも、そのお金を殺すためでなく、生きるために使うことはできないのかなと考えてしま

います。

ぼくに助けられることができたのは、子猫一匹でした。この一匹ではなにも変わらないかもしれないけれど、みんながこの殺処分について考えて、その中の数人でも手をのばしてくれたら、きっとたくさん命が救われます。ぼくは大人になったら動物に携わる仕事をするのが夢です。人と動物が共に幸せに暮らしていける、そんな優しい未来を作る手伝いをほくもしたいと思っています。